



# そろそろ気付いて



伽藍

「……深春、君」

教室に一人残っていたクラスメイトの少年に、私は何度か深呼吸を繰り返した後、ゆっくりと声を掛けた。驚いたように、深春君が振り返る。

「あれ、冬希さん？」

「うん、……まだ、帰ってなかったんだ？」

「ああ、千秋の委員会待ち」

知っている。それは、千秋君の恋人である夏実を確認しているのだから。

にこっと微笑む表情は、昔から大好きな、明るくて優しいものだ。

私と深春君は、幼馴染の恋人同士だった。先程名前の出た千秋君と夏実も、同じ頃からの付き合いだ。

「冬希さんは、どうしたの？ もう、ホームルームから三十分近く経ってるけど……」

「私も、夏実待ちだったの。でも、塾だから、もう行かなくちゃ」

これは、半分嘘。ずっと、教室から深春君以外の生徒がいなくなるのを待ってた。けれど塾があるのは本当だから、一人で焦っていたのだ。

「そっか」

「うん」

「……」

「……」

微妙な沈黙。途切れた会話をどうにかしなければと思っても、どうしたら良いか判らない。

いつも、いつもそうだった。子供の頃からずっと四人でいて、昔から、明るくてリーダーシップのある深春君が好きだった。だから、夏実が千秋君と付き合う事になって、暫くして深春君に告白された時、凄く嬉しかった。

けれど、少しして気付いて仕舞った。

深春君は、本当は私を好きじゃなかったのかも知れない。

元々好きだったのは、夏実だったのかも知れない。

だって夏実は可愛くて、明るくて、お喋りで、こんな、暗くて話題の少ない私なんかより、ずっとずっと一緒にいて楽しいだろう。

深春君は、夏実が千秋君と付き合い始めた事にショックを受けて、私を好きだと思い込んだのかも知れない。

勿論、深春君自身はそんな事、気付いていないに違いない。彼が誰かを身代わりにするような人間ではないと、私はよく知っている。

だからきっと、彼も自分の本当の気持ちを知らないのだ。

知らないまま失恋して仕舞ったから、他に一番近くにいた女の子の、私を好きだと思い込むようになった。

こんな事を言ったら、勿論深春君は否定するだろう。もしかしたら怒るかも知れない。

でも、出来るなら怒って欲しい。だってそれは、怒るくらいに私を気にしてくれているって、そういう事でしょう。

「……さん、冬希さん？」

「——え、あ、ごめんなさい！」

自分が暗い考えに浸っていた事に気付いて、私は慌てて顔を上げた。深春君が、きょとんとした顔でこちらを見下ろしている。

「どうしたの、具合悪い？」

「ち、違うの、ちょっと、考え事をしてて、——ああ、そうだ」

深春君に対して後ろめたい事を考えていたからだろうか、すぐにこの場から離れたくて堪らない。けれどそういう訳にもいかないから、私は本題に入る事にした。

「あ、あの、深春君」

深呼吸を、一つ。

鞆から取り出した、ラッピングされた手作りのお菓子を、両手で差し出した。

こっそりと、願いを託して。

「こ、これ！ ……その、バレンタイン、だから」

代替品でも良いから、傍にいさせてよ。

バレンタインだから、と。

差し出された可愛らしい小袋に、俺は面食らって数秒、動きを止めた。

「あ、有り難う……」

何をどもっているんだと自分を叱咤しながら、今にも震えそうな手でプレゼントを受け取る。

受け取ってから、そうか今日は二月十四日かと、遅ればせながら気付いた。正直、全く頭が回っていなかった。

突然放課後の教室に入って来た恋人に、俺は情けない事に話題の一つも上手く提供する事が出来なかった。あいつ自身お喋りな夏実相手とか、寡黙過ぎて必要最低限すら話しているのか怪しい千秋相手なら、幾らでも下らない事を喋り続けられるのに……全く、彼女の前では緊張して舌が回ってくれないのだ。

昔から両片思いだった千秋と夏実が付き合いだしてから、俺もそろそろ勝負を決める時だと冬希さんに告白した。無駄に煩いだけの夏実とは違って物静かな冬希さんは、優しくて大人びていて気遣い屋で頭も良くて……ずっと、同い年なのに届かないような、憧れの存在だった。

想いを受け取って貰えて、とても嬉しかった。

でも、少しして考え始めた。

冬希さんは、本当は、千秋が好きだったのかも知れない。

千秋は昔から夏実が好きで、夏実も千秋が好きで、一見でこぼこなのに、上手くいっているらしい。冬希さんにとって、夏実は幼馴染の親友だ。親友の幸せを壊すような真似は、彼女には出来ないだろう。

だから――途方に暮れていた時に俺が告白したから、思わずその手を取って仕舞っただけなのかも知れない。

勿論、俺の事だって冬希さんは凄く大切に想ってくれている。もしかしたら、断った事で俺が傷付くとか考えたのかも知れない。

恋人同士の筈なのに、こんな考えは最低だ。それでも、優し過ぎる冬希さんは誰かを嫌ったりしないだろうけれど、俺を好きになる理由だって無いように思うのだ。

こんな、馬鹿みたいにもいつも騒いでいるだけが取り柄みたいな男なんて。物静かだが思慮深い千秋の方が、ずっと頼りになるし、冬希さんも一緒にいて楽なんじゃないだろうか。

挙げ句、彼女の前ではまともに喋る事すら出来ないのに。

優しく、穏やかで、けれど時に厳しい事もずばりというような面もある、彼女の強さが好きだ。

昔から、好きだった。だから付き合い始めて今更、この関係を壊すような事を口に出せる訳がなくて。

受け取ったお菓子を見下ろしてから、俺は冬希さんを見返した。冬希さんは、真っ赤な顔でこちらを見上げている。

昔は同じくらいの背だったのに、今では頭一つ分の差が出来て仕舞った。

「あの、……ホワイトデー、楽しみにしてて」

ホワイトデーは、既に冬休みだ。だからデートに誘いたくて、だから、ええと。

夏実が見ていたら張り倒されるかも知れない。

「ううん、気にしないで。――もう行くね」

「ああ、うん、気を付けて」

にっこりと、とても可愛らしい笑みを残して教室を出て行った冬希さんに間抜けな言葉を返してから、俺ははっと我に返る。

何で一緒に帰るって言わなかったんだろう、俺。千秋になんて、後から何とでも言えるじゃないか。

泣きたい気分になりながら、俺は貰ったお菓子をぎゅっと抱き締めた。

ふわりと、甘い匂いがした。

ねえ、いつか、本当に俺を好きになってよ。

今は、代替品でも構わないから。

.....あああもう焦れたい！ 何、何なのあいつら！ あたし達、来年は高校三年生！ もうすぐ卒業！ 何で成長しないの、何でいつまでももだもだしてんの！ 深春もなあ、あのヘタレめ、何でそこでデートに誘わないのよもうあああああ！ 見てるこっちが苛々する！ 苛々する！ .....ちょっと、何よちいちゃん？ そんな呆れたような――ちょ、止めて、溜め息止めて！ 判ってるわよ覗き見するなって言いたいんでしょ？ もう、堅物だなあ.....でも仕方無いじゃない、気になるんだもの。真面目君過ぎるわよ、ちいちゃん？ .....あれ、何で不機嫌そうにしてるの？ 呼び方は今更でしょ、ちいちゃん可愛いじゃないちいちゃん.....元々千秋って女の子みたいな名前なんだし？ それより気になってるんだけど何であんたさっきから喋んないの、一言も発しないの？ 昔はもうちょっと話したよね、っていうか深春達の前では今も普通に.....ではないけど、必要最低限は喋るよね？ 毎日毎日平日も休日も会ってる筈なのにもう何日もあんたの声を聞いてない気がするのはあたしの気の所為？ あたしはちいちゃん専用翻訳係じゃないんだけど！ これで意外と女子に人気なのがムカつくわ、ちいちゃんのクセに.....ちいちゃんにはあたしだけいけば良いのに！ ――ちょ、顔を赤くしないで眼を逸らさないで、こっちまで恥ずかしくなるわ、本当の事を言っただけなのに！ .....ああもう、深春も深春よ、何であたし達の前じゃ無駄な事までベラベラ話すクセに冬希の前だとあんなに口下手になるのかしら。不器用にも程があるわ、あれじゃあ勘違いされるに決まってるじゃない！ ちゃっかり両想いなのにお互いとんでもない思い違いをしてるって、いつになったら気付くのかしら.....え、っていうか、そのまま別れるの？ 今良い雰囲気だったじゃない、キスの一つもしなさいよ記念に写真撮っというてあげるのに！ ちいちゃん、きっと深春から電話来るわよ、あたしにも多分冬希から.....ほら、来た！ もう、いい加減、惚気と紙一重のお悩み相談もうんざりだわ、我慢が祟ってうっかりあたしがどっきり仕掛けても良いのかしら、良くないでしょ？ だったらねえ、二人とも、そろそろお互い好き合ってるって事に気付いて！